



## 山から贈られたものを伝えたい

-degeneration-

坂下直枝さん

8000mのジャイアントもパタゴニアの岩峰も、常に同じ姿勢で向き合ってきた坂下直枝さん。登山活動の一方、イヴォン・ショイナード著「アイスクライミング」を翻訳。山から贈られたものを次の世代のクライマー達に伝えていきたいとおっしゃる今、お話を伺うことができました。

(インタビューと文：張晶子)

### ◆どんな子ども時代をすごしましたか？

一両親が非常に厳しかったので自我を主張することが難しかったです。厳格な父は、意に沿わないと裸で雪の中に投げ込んだり、今なら児童虐待のようなことも随分しましたが、その一方で、釣り、素潜り、狩猟など、山も海も連れ回してくれました。

小学校から高校まで無遅刻・無欠席だったから健康だったのでしょうか。どんな運動も試合は好きだが練習が嫌いで、野球・柔道・体操・弓道と長続きはしませんでした。反抗心と生意気と負けず嫌い、それと少しの正義感のある子どもだったと思います。

### ◆山を意識するようになったきっかけは？

一大学に入学して間もなく、授業料値上げ反対運動で学生はストライキに入っていました。卒業できないと大学側からおどかされクラス委員と私を除き全員が寝返ってしまったので、もう授業に出ないことに決めたときのことです。心配した友人に誘われ、3月の鳳凰三山に行きました。ピッケルもなく、夏用の借り物シュラフにマットも無し、トックリセーターに学生ズボンで借り物キャラバンシューズ。小屋の親父さんに「死んじゃうぞ」と言われましたが、幸い天候が良く、稜線から見えた白根三山に心惹かれました。

友人が「俺たちでは無理」と言った白根三山に、今度はヤッケとピッケルも借り、5月に一人で行きました。間ノ岳の稜線から転落したり、広河原沢下降も難しく、今から考えると危険で無茶クチャな登山でした。

◆転機となった山は？

一年末には一人で北岳を登りました。ナイロンのダブルヤッケ、オーバー手袋・オーバーシューズを9800円で購入し、タニのアイゼンも買いました。登山靴は下宿の物置に山岳部の卒業生が置いていったものを使わせてもらいました。

翌2月の甲斐駒・仙丈ではマットを買えなかったので、炭屋さんにもらった炭俵をキスリングにつけて歩いていたら、前後して歩いていた早大岳友会の男にさんざんバカにされ、その晩二人だけだった北沢峠の小屋では、岩登りや冬山の話をつっぷり聞かされました。癪だったので、翌日甲斐駒へのラッセルでぐんぐん飛ばすと、相手は遅れ始め、「今日は調子が悪い。先に行ってくれ。」と言って、結局ついて来ませんでした。彼の自慢話のおかげで「岩登り」というジャンルがあることを知りました。

◆現在に至までの山とお仕事の関係、思いなど聞かせてください。

—当分卒業しないつもりで、大学4年の夏、一ヶ月南アルプス荒川小屋の小屋番になりました。当時は8月初旬からお盆を除くと登山客は少なく、本を持ち込んで読書三昧でした。翌年も夏は小屋番として過ごし、この年、客として来た山学同志会の会員が、冬山・岩登り・海外の山についていろいろ親切に教えてくれたのです。

山と仕事の両立は難しいと思い、家庭教師・学習塾経営・大学勤務などで都合12年の学生生活を送りました。6年生だった1970年に山学同志会に入会しましたが「学生かよ。続かねーな」と言われたのを覚えています。

ジャーヌー北壁を登った後、転戦したアフガニスタンのノシャックでひどい高山病になり九死に一生を得、帰国後学生生活に終止符を打ち日本電波工業に入社しました。30歳直前でした。

海外営業部で米・独・スイスを担当し、3年間、朝8時半から夜10時過ぎまで真面目に働きましたが、休暇の取りにくい職場でした。その間、ソ連での国際岩登競技会の日本代表として1週間の日程を2週間と偽って休暇申請し、競技の後こっそりドリユ西壁を登りました。

しかし、春のカンチェンジュンガと同じ年の冬のアンナプルナI峰単独の計画を立て、会社を辞めました。その後は、翻訳・魚河岸・土方・沖仲仕などの肉体労働で遠征費用を稼ぎました。

K2 北稜初登攀の後、友人のシュイナードさんから、シュイナード・イクイップメントの代理店をやってくれと頼まれ、承知して今日に至っています。

クライミングや登山が好きな社員、海外取引先の社員に囲まれて、何とも都合の良い、ストレスの少ない環境で仕事をしています。

山とクライミングは、今後もずっと続けて行くつもりです。

◆現状の山の環境について思うことはありますか？

—子どもだった昭和 20 年代は、海や山にはほとんど人などいませんでした。70%が第一次産業従事者では遊ぶ余裕もなかったのでしょう。城ヶ崎の岩場付近の海岸に釣り人が捨てた釣針や撒き餌が捨てられているのを見て、大衆化した釣りがもたらすマナーの低下が気になりました。その点、山は愛好者が増えた割にはマナーが維持されているのかもしれない。

ただ、登山者が急激に増えた富士山などは、岩石の崩落を防ぐ巨大な防護壁が林立し、スキー場のような閉鎖的な商業空間の感じがします。小屋も増築され、それらに使われている鉄・石・プラスチックなどの大量の人工物は自然景観をそれだけ破壊している気がします。登山者の保護のためと称して、鎖場が増え、丸太やセメントや石を敷き詰めた登山道が増えて、折角の美しい岩や景観を毀損しています。

一方で、不人気の山道はどんどん荒れて、自然が回復を見せていたりします。昔は明瞭な踏み跡があった谷川岳一の倉沢上部などは深い笹に覆われています。自然はある意味、強い復元力を持っているので、最低限の手入れ【人工物】と自然の復元力のバランスを保ちながら、美しい山の環境が維持できるのが理想ではないでしょうか。